

読み手からみると読書には3つの領域があるように思います。一つめは、生活や仕事、趣味などに欠かせない知識や技術を会得するためのハウツー本などと言われているもの、二つめは専門書で大学の学部や専門的職業に関わるもの、三つめは現代人としての教養や資質、価値など人間形成に関するものです。こうした分類は、もちろん相対的なものですが、いずれにしても、一や二の読書は必要に迫られてすることが多いので、自由読書の「自由」を余すところなく表現していて読書の個人差や質を左右しているのは三つめの領域です。哲学、宗教学、文学などが中心ですが、それらに限られるわけではありません。

青年期に限らず、私たちは、生涯の間に、様々な悩みや困難に直面し、人生の蹉跌を経験しますが、そうした状況からの脱却の仕方には正解はありません。どんなに博識な教養をつんでも、多くのすぐれた実践書を会得しても、読書から得た知と価値と力を、自分の体験や実践、生き様をとおして、自らのうちに結実させることなしには問題に立ち向かう力となりえることはありません。しかし、こうした努力、行動への勇気と力を与えてくれるような本に出会うのは、なかなか難しいことでもあります。勢い、私も、体験記や自叙伝、伝記などの系列のものに、ストレートに成果を求めたことも多々ありました。そんな時、大学で、フローベールやE.ゾラの翻訳・研究で高名な田辺貞乃助の『文学論』の講義をうけて古典への興味を触発されました。それには、田辺の洒脱で諧謔的な口物の魅力もありましたが、なんととっても長い時間をかけて価値や評価の定まったものには学ぶべきことが多いという真理に改めて気づかされたのです。

こうした古典の代表的なものは「岩波文庫100冊の本」に収録されていますが、私が特に心ひかれたのは大河小説や時代の転換に向き合った小説でした。バルザック（「谷間のゆり」）、スタンダール（「赤と黒」）、トルストイ（「戦争と平和」）、ドストエフスキー（「罪と罰」「カラマーゾフの兄弟」）、ツルゲーネフ（「父と子」）、チャーホフ（「桜の園」）、ロマン・ローラン（「ジャン・クリストフ」「ペートル・ベン・の生涯」）、ユーゴー（「レ・ミゼラブル」）、ゲーテ（「若きウェルテルの悩み」「ファウスト」）、ヘルマン・ヘッセ（「デミアン」）、シェイクスピア（「ヴェニスの商人」「ハムレット」）などですが、100選から漏れたものとしては、トルストイの「アンナ・カレーニナ」やマルタン・デュ・ガール「チボー一家の人々」などがあります。

これらの中には、2、3度読み返したものもあり、今、思い起こしても、懐かしいものばかりです。ただ、古典は、時代状況を知らなければ、読み込めないという課題がつきまとっています。文学、歴史、哲学、政治学などの小事典を引きながらページをめくった記憶がよみがえります。また、含蓄のある作品であるほど、読み方は、読み手の力量に左右されます。私は、文庫本の最後に読後感を記したり、遠距離交際の相手に読後記をしたためたりして、鮮明な記憶と印象を強く、長くとどめ置く工夫をして、読書力を高めることに意をつくしました。

文学に限らず古典の世界は無敵大ですが、愛と同じで、忍耐強くたゆまない努力を積み重ねれば、思わない贈り物を手にすることができるかと確信しています。

※紹介された本は、当館に所蔵しています。

新装世界の文学セレクション 中央公論社 (908:Se22)

『谷間のゆり』バルザック  
『赤と黒』スタンダール  
『罪と罰』ドストエフスキー  
『桜の園』チェーホフ  
『若きウェルテルの悩み』『ファウスト』ゲーテ  
『デミアン』ヘルマン・ヘッセ  
『ヴェニスの商人』『ハムレット』シェイクスピア  
『アンナ・カレーニナ』トルストイ

河出世界文学全集 河出書房新社 (908:Ka92)

『戦争と平和』トルストイ  
『赤と黒』スタンダール  
『罪と罰』ドストエフスキー  
『桜の園』チェーホフ  
『レ・ミゼラブル』ユーゴー  
『ファウスト』ゲーテ  
『ハムレット』シェイクスピア

『チボー家の人々』マルタン・デュ・ガール 白水社 (953:D95)

※当館に所蔵はありませんので、最寄りの公共図書館等をご利用下さい。

『カラマーゾフの兄弟』ドストエフスキー  
『父と子』ツルゲーネフ  
『ジャン・クリストフ』『ベートベン生涯』ロマン・ローラン